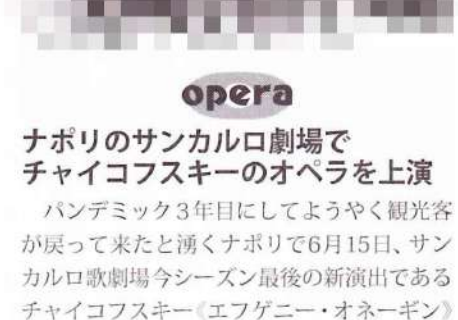
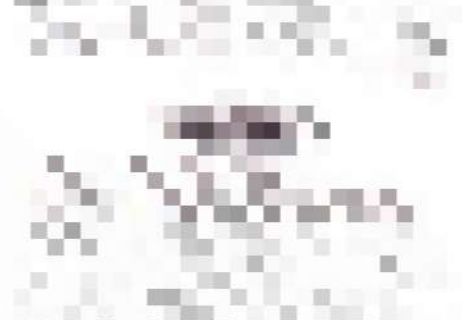
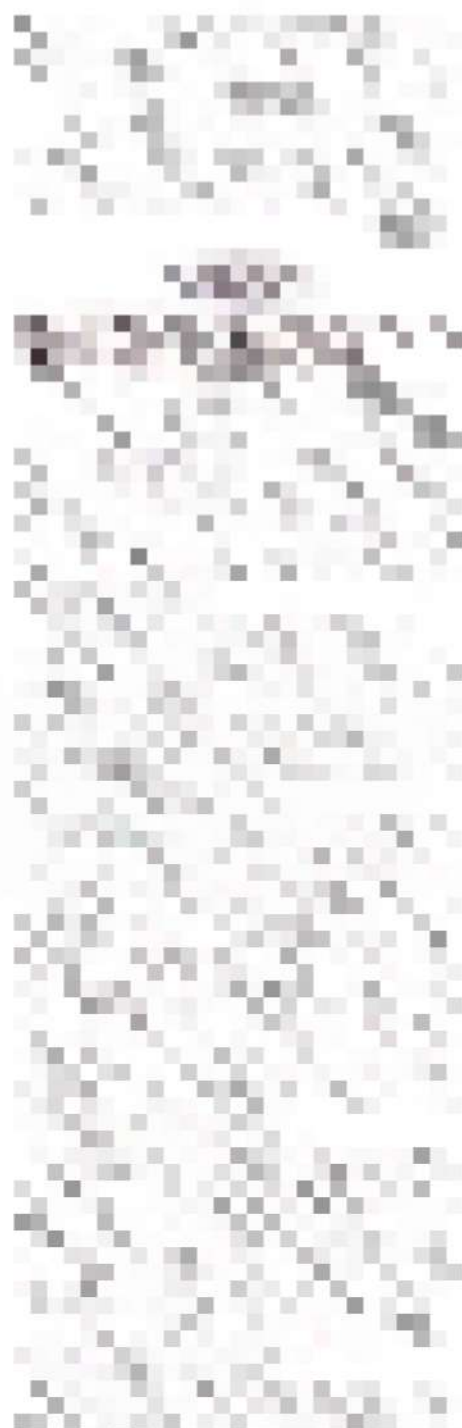
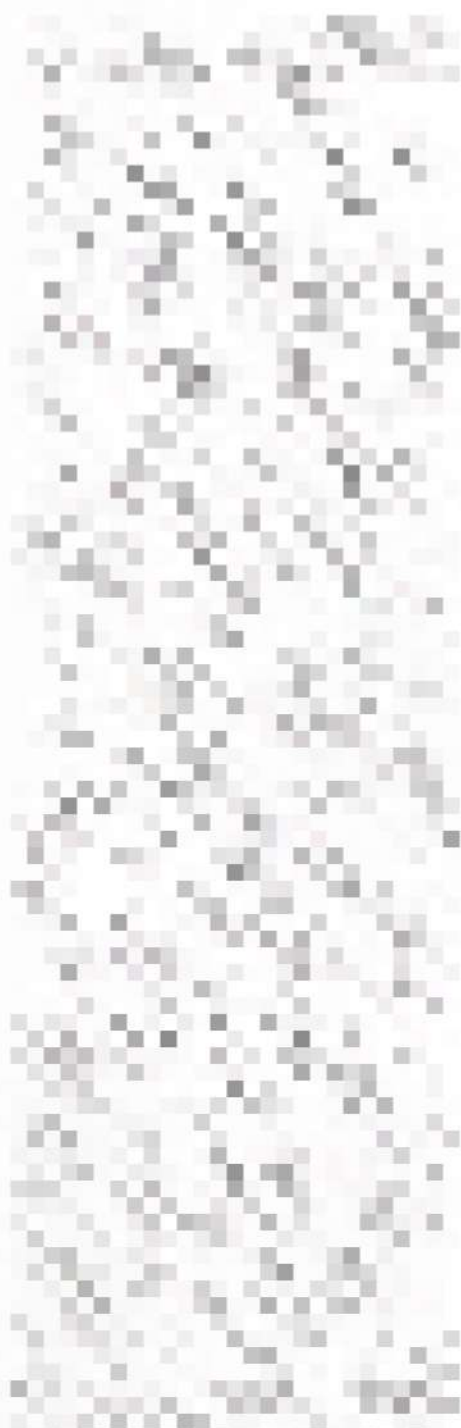
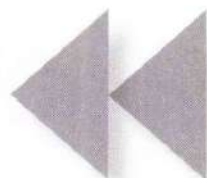


Scramble Shot



opera

ナポリのサンカルロ劇場で チャイコフスキーのオペラを上演

パンデミック3年目にしてようやく観光客が戻って来たと湧くナポリで6月15日、サンカルロ歌劇場今シーズン最後の新演出であるチャイコフスキー《エフゲニー・オネーギン》が無事プレミアを迎えた。このバリー・コス

キーの演出はベルリン・コーミッシェオーパーのもので、チューリヒ歌劇場でも2017/18年のシーズンオープニングを飾っている。

しかしまさにこの時期にロシア・オペラ上演を執行する意義について劇場側に問うと、「これだけのキャストがそろった演目を上演しない手はない」というコメントが返ってきた。

ゲネラルプロベ（本番前の総稽古）を成功させたあと、コロナ禍で延期されていた録音のためにスウェーデンに発ったというファビオ・ルイジは、初日は半時間前に劇場に到着したという超過密スケジュールであった。サンカルロ歌劇場の観客の質も落ちたのか、携帯電話でビデオを撮るなど、劇場内には静寂が訪れない。オーケストラもルイジの指示に即、応えることができず、歌手陣も自己主張が強く、アンサンブルとしての精度が上がらない。そんな苦闘の末、間奏曲辺りからようやく落ち着いてくると、ルイジの芸術が際立って来た。タチアーナ役のエレナ・ステイキナはルイジの指示を100パーセント体现し、アルトゥール・ルチンスキーの題名役も健闘、レンスキーのミヒャエル・ファビアーノも美声を聴かせた。

休憩後は複数の観客が戻って来なかったが、おかげで落ち着いて観劇でき、最後は大成功を収めた。（中 東生）



この時期のロシア作品の上演だけに、話題となったサンカルロ劇場の（エフゲニー・オネーギン）から
© Luciano Romano//Teatro San Carlo